



*この見学会は 平成29年度和歌山県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業の補助を受けて実施しています

旧西村家住宅

旧西村家住宅は、丹鶴山の南東、ポッツリ山の南側を通る伊佐田通りに面した、洋風の住宅です。西村伊作氏が自ら設計した3度目の自邸になります。大正3（1914）年に建て始めて、翌年の夏に完成しました。この建物は居間（リビング）や食堂（ダイニング）が中心の間取りとされ、家族の生活空間を大切にしています。また、電気やガスが引かれ、給排水設備や給湯設備も有しています。いずれも現在では当たり前となった住宅のスタイルですが、それらがあまり普及していなかった時代に高いレベルで実現させています。そして、そのすがたを今日までよく伝える希少な建物として、平成22年6月に国の重要文化財に指定されました。

建物は「西村記念館」として昭和53年より一般に公開され、平成10年からは建物の寄贈を受けた新宮市が管理を引き継いでいます。

建築後100年が経過した建物は、建物下の地盤が一部で沈み、その影響で屋根や壁に破損が生じ、その破損部分から雨漏りしてさらに傷むなど、構造的に不安定な状態となっていました。

そこで、新宮市では平成28年度から3か年の計画で、地盤の安定化を図りながら建物を健全にする保存修理工事を進めています。

工事中の調査では、大正10年代に大掛かりな改修が行われたことや、それと同時に伊佐田通りも含めた敷地内外での整備があったこともわかりました。この整備で庭に敷かれた石材は近世期以前の使用がうかがえて、新宮城の南にあった伊佐田池を埋め立てた際に周辺の屋敷地などから持ち込まれた可能性もあります。

調査の結果などを踏まえて、文化庁、和歌山県、新宮市とで検討した結果、今回の工事では大正後期の改修後のすがたに戻して修理することになりました。道向かいには大正末期と昭和戦前期に建てられた住宅が現在もあるなど、工事完成後には当時の風情をこの一画でより感じることができそうです。



敷地を南から見る
（後方にポッツリ山、その向こうには新宮城跡）



居間（手前）・食堂（奥）の内観
（明るく開放的な空間となっている）

西村伊作

この建物を設計・監督した西村伊作氏は、明治17（1884）年に大石余平・ふゆの長男として新宮横町（現・新宮市）に生まれます。

7歳の時、移り住んでいた愛知県で濃尾地震に遭い、両親を亡くしてしまいます。その後は母方の実家である西村家の養子となって、祖母や叔父の大石誠之助氏などに育てられました。

明治38年頃の自邸の設計を皮切りに、以降も建物や家具などの設計を続けていきます。新宮市内で手掛けた建造物として、大正5年の新宮町公会堂（昨年解体された市民会館の前身建物）、同9年の新宮教会会堂（現在のオークワ仲ノ町店付近）、同10年の旧第一尋常小学校校門（戦後に丹鶴小学校校門として移築、現存）、同15年の旧チャップマン邸（下写真の緑色屋根の建物、現存）が確認されています。南谷墓地にある大石家墓域の石積みも伊作氏の関与が想定されます。

また、西村伊作氏は教育面にも強い関心を示し、大正10年には文化学院を東京に設立します。自邸や学校の設計を通して、生活の改善や若者の成長のあり方を模索しました。同時に、住宅や教育に関する本も多く著しています。旧西村家住宅にもそうした過程が随所にかがえます。今回の保存修理工事によって建物の評価や伊作氏の功績をさらに高めていくことができそうです。



伊佐田通りから見た主屋
（左奥は大正15年築の旧チャップマン邸）

紀伊国新宮城之図



紀伊国新宮城之図(国立公文書館内閣文庫蔵)に加筆
図は特別展「熊野速玉大社の名宝」和歌山県立博物館から転載

新宮城跡

新宮城は、関ヶ原の戦いで功をたてた浅野幸長が紀州藩主となるのに伴い、浅野一族の重臣である浅野忠吉が新宮に入り、慶長六年（1601）に築城を開始しました。元和元年（1615）に一国一城令により廃城となりますが、元和四年（1618）に再び築城が認められます。しかし、元和五年（1619）に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移ります。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重伸が入り築城を続けます。2代重良は伊佐田の堀を掘削するなどして、寛永十年（1633）に完成たとされます。その後も、度重なる地震や暴風雨により石垣や櫓などが損壊し、再三普請や作事が繰り返されています。

江戸時代を通じて熊野地方の拠点であった新宮城も、江戸幕府が廃止され、さらに明治四年（1871）の廃藩置県とともに廃城となり、城としての使命を終えます。それとともに、城内にあった建物もすべて取り壊されました。

新宮城の構造は、丹鶴山（最高所標高約60m）を中心に縄張した平山城で、山上に本丸・天守台、出丸、鐘ノ丸、松ノ丸を置き、西麓には二ノ丸や大手門、北方の川沿いには水ノ手郭を配しています。熊野川や千穂ヶ峯が天然の遮断施設となることや城下全体が周囲から隔絶した平野部に位置することから城全体を巡る堀はないものの、南側に溜池状の堀「伊佐田の堀」を掘削していました。天守閣は3層



本丸枳形虎口

5階であったとの説もありますが明確ではありません。本丸をはじめ鐘ノ丸・松ノ丸には枳形虎口があり、各郭が独立した形態となっています。

石垣の積み方は切り込みハギが主で、天守台や松ノ丸の一部に崩落がある以外は比較的良好に残存しています。また、本丸や鐘ノ丸には打ち込みハギで積まれた箇所があり浅野期の石垣の名残であるとされています。また、本丸枳形や出丸付近には、新しい技法とされる布積みや亀甲積みの箇所があるなど、度々あったとされる改修の変遷を石垣で見取ることができます。このほか、天守台や本丸虎口の石垣には「大」「〇」「△」などの刻印があるのも特徴です。

発掘調査は、本丸・出丸・鐘ノ丸・松ノ丸・大手道・水ノ手郭などで実施されています。水ノ手郭は船着き場であるとともに、江戸時代半ば以降は、約20棟の炭納屋が密集して建てられていました。当時、炭は専売制で、その利権は水野家の財政を潤し、知行高3万5千石以上の財力を持っていました。



石垣刻印



水ノ手郭・炭納屋群 新宮市教育委員会提供

新宮城下町遺跡

新宮城下町遺跡は熊野川沿いにあり、国指定史跡の新宮城跡の西側に位置しています。新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査で江戸時代、中世（平安時代末頃から室町時代）、古墳時代、縄文時代の多くの遺構が検出され、多量の土器が出土するなど、新宮・熊野の歴史を紐解く上でも大変重要な遺跡であることが判明しました。

江戸時代の武家屋敷

江戸時代の遺構には、道路遺構と武家の屋敷地があります。道路遺構は2本確認しています。これらは「河原町通」と「竹矢町通」と呼ばれていたことが江戸時代に描かれた絵図などから窺うことができます。道路面は、掘割状に屋敷地より約0.6m低く構築されています。路面は川方向に緩やかに下っており、城下町の排水も兼ねていると言えます。構築当初の規模は河原町通が幅5.2mで、西側に幅・深さ約0.3mの石組みの側溝を設けています。竹矢町通は幅3.0mで、道路面はどちらも細かい円礫を敷き固めています。

屋敷地は、熊野川流域で産する花崗斑岩で築かれた石垣で区画されています。石垣の積み方は各所で異なり、江戸時代初期（浅野期）の特徴をもつ箇所や、新しい様相をもつ箇所があります。ただ、他に屋敷地区画を示す石垣などが確認されないことから、石垣の位置は城下町形成時のままで、改修を行いつつも幕末まで石垣は原位置を保っていたと判断できます。明らかになっている屋敷地の規模は、東西44m、南北35mでおおよそ1,500㎡を越す面積を有していることがわかりました。屋敷地は、城下町のなかでも新宮城大手門近くを占地することやその規模などから上級家臣のものと考えられます。



江戸時代の河原町通と屋敷地

中世の湊

中世の遺構には、掘立柱建物群や地下式倉庫群・大形土坑群・工房跡・石段・道路遺構などがあります。掘立柱建物には柱間が2.1mで6間×4間と当時としては大型の建物があり、連綿と建替えが行われています。地下式倉庫は11基検出しています。時期差があるとみられますが、形態は大きく3タイプに分けることができます。石段・道路遺構は河原に向かって下るもので、道路遺構の両脇には石垣で区画された階段状の敷地があり、そこでは鍛冶や鋳造が行われていたと考えられます。

遺構の内容や当遺跡の立地から、中世の遺構は湊に関連するものであると想定でき、これらは鎌倉時代の文献史料に登場する「新宮津」の一部であった可能性もあります。調査で出土した遺物には東海地方や瀬戸内地方の土器類の他に多くの輸入陶磁器があり、東西日本の海上交通の中継地かつ物流拠点であったことを示唆しています。

縄文時代・古墳時代の集落

古墳時代や縄文時代の遺構には土坑などがあり、集落が展開していたと考えられます。縄文時代の土坑は、市内で初めて検出された縄文時代の遺構といえます。



中世の石段・道路遺構 新宮市教育委員会提供



古墳時代の土坑